

お手っちゃん

青森県 高森 美由紀

左半身不随の祖母が左手に名前をつけた。

「お手っちゃん」

春先に卒中を患った祖母は、しばらくの間、動かない左手に「こんちくしょう」と吐きつけては、右手で殴りつけたりして随分いじめていたのだが、秋口のその日、突如「お手っちゃんがね」と言い出したので、ついにぼけたかとゾツとした。

「お手っちゃんどこやしてな、踊りこ踊ったのせ。まあ、ろくたいぬがねーで、おら、お手っちゃんけつぱれつて励まし励まし踊った」

祖母は趣味と実益を兼ねて日本舞踊をしており、結婚式や入学卒業式に呼ばれては披露したり、人様に教えたりしていた。テレビで踊りの大会が放送されると、目を輝かせて食い入るようにつめ、振り付けを覚える努力をしたのだった。ほとんど毎日、LPレコードに合わせて、狭い六畳間での練習を欠かさなかった。

踊っていれば、嫌なことも悲しいことも忘れられると言った。踊りは祖母の生きが이었다。

ところが、病気によって半身が動かなくなると唯一の楽しみが一転して苦痛に変わってしまった。踊りなど見たくもない。踊りの話などタブーになった。毎日毎晩、愚痴をこぼし続け、半身を他人のように呪い続けた。

踊り仲間が見舞いに来ても、プライドの高い祖母はこんな姿は見せられないとして、決して会わなかった。

「お手っちゃん、て。：どしたの急に」

意表をつかれて半笑いで尋ねると、祖母は口を尖らせ「別に」とそっぽを向いた。「お手っちゃん」を力任せにぎゅうぎゅうと揉んでいる。言いたいことをうまく言葉にまとめられないときによくする仕草だ。まるで、うどんの生地でも伸ばすように左手に右手の腹を押し付け押し付けするのだ。

「お手っちゃんはいぬがねど、右手だけめごがるのはいぐね。おらど八十年一緒だったのさ、えこひいきはわがね」

祖母はいかめしい顔つきで首を振った。

一体どういう心境の変化だろう。

祖母の右手にハンドクリームをすりこんでやると、今度は自らの右手でお手っちゃん

んにクリームをすりこむ。

お手っちゃんは紡績会社でも、祖母の右手と阿吽の呼吸で仕事をし、満州では瓦礫交じりの劣悪な土に鉄をふるい、帰国してからは父と伯母のおしめを洗い、家族四人のためにフライパンを振り続けた。まさに左手ながら祖母の右腕として働いてきた。

着物の着付けも得意で、よく近所の奥様方に頼まれた。両手を無駄なく使い、テキパキとあつという間に着せてしまう祖母は私の誇りだった。最後に襟をシュツと引っ張って着付けを完成させるのが祖母のやり方だった。

そうされると、着せてもらった人の顔がきりりと締まって「さあ、行くぞ」という気概が発せられるのだ。祖母は自分の仕事を満足げに眺めていた。

八十年の手生で、お手っちゃんの指先は鉤型に曲がったまま、まっすぐに伸びなくなったし、太く逞しく、関節は樹の瘤のようにゴツゴツしていて、皮膚は象の尻のように硬く分厚くなっていた。

「おらば助けできたんだおんのお。お手っちゃん」

以前は「今日の体具合どう？」と尋ねていたが、お手っちゃんが現れてからは「今日のお手っちゃんはどう？」と訊くようになった。すると祖母は「なんぼが機嫌こいい」とにっこりしたり、「まぐね」と渋面を拵えたりした。

家族以外の面会は相変わらず断り続けた。けれど、お手っちゃんと話すようになってから祖母の憂鬱さや、ひねくれた繰言は鳴りを潜めた。

祖母の顔を見た弔問客は「穏やかな顔っこだねえ」と口を揃えた。

守り刀を置かれて、胸に組まれた手に、意識を向ける人はいない。

右手の三分の二ほどに痩せたお手っちゃんだが、まだまだ逞しさは充分。ハンドクリームを塗りこみ続けたおかげで、右手と同じほどしっとりすべすべしていた。

私は釘を打つ間際、祖母の襟をシュツと引っ張った。

さあ、門出だよ、ばっちゃん。